

おんちよろちよろあなのぞき

むかし、あるところに、おばあさんがひとりでくらしていました。

ある夕方、旅のお坊さんぼうがやってきて、

「ひとばん泊とめてくださらんか」といいました。おばあさんは、

「お坊さまなら、どうぞ泊とまってください」といって、家に入れてあげました。そして、

「お坊さま、ひとつ、お仏壇ぶつだんにお経きようをあげてくださいな」とたのみました。

ところが、このお坊さんは、お経を知りませんでした。お坊さんがこまっていると、仏壇のそばのあなから、ねずみがちよろつと顔を出して、またひっこみました。そこでお坊さんは、

おんちよろちよろ あなのぞき

と、お経のようにいいました。すると、また、ねずみが顔を出しました。お坊さんは、

またもちよろちよろ あなのぞき

といいました。すると、ねずみがちゅうちゅう鳴きました。お坊さんは、

何かこそこそ もうされそうろう

といいました。ねずみはそのままあなの中にもどっていきました。お坊さんは、

そのままあとへと 帰られそうろう

といって、かねをチーンとたたいてお経を終わりました。

おばあさんは、ありがたいお経をあげてもらって、おおよろこびでお坊さんにごちそうをして、ひとばん寝ねかせてあげました。

つぎの日、お坊さんはおばあさんにお礼をいって出ていきました。

それからというもの、おばあさんは、まいばん、お坊さんに教えてもらったお経をあげていました。

あるばん、おばあさんがいつものようにお経をあげていると、どろぼうがふたりやってきました。ひとりが、障子しょうじのあなからおばあさんの家の中をのぞきました。家の中でおばあさんが、

おんちよろちよろ あなのぞき

といいました。そこで、もうひとりのどろぼうが、かわつてのぞきました。おばあさん

は、

またもちろんよろ あなのぞき

といました。ふたりのどろぼうは、

「なんだか、ばあさん、おれたちに気づいたようだぞ」と、ひそひそ話をしました。するとおばあさんが、

何かこそこそ もうされそうろう

といました。どろぼうたちがびっくりしていると、おばあさんは、

そのままあとへと 帰られそうろう

といました。

どろぼうたちは、何もとらずにあわてて帰っていったということです。

おしまい。

出典：『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話：『加無波良夜譚』 文野白駒編 三元社